

蟻鼻錢に就て

京都帝國大學總長
文學博士 濱田耕作

一

世界各國の諸民族中には、圓形の金屬貨幣にのみ慣れてゐる我々にとつて、想像にもかぬ種々不思議な形をした貨幣を使用し、或は會つて使用したものがあつた。中にも我が隣邦支那に於いては、最近まで行はれてゐた圓形方孔の銅錢が周末漢初から出現する迄には、可成變つた種類の貨幣が多く行はれてゐた。かの小刀形をした刀錢の如き、また鋤形をした布泉の如きは、此等異形貨のうち最も著しいものであることは人の皆知る所である。なほ此の外藕心錢と云ふものや、各様の厭勝錢などがある上に、更に貝貨と蟻鼻錢といふものもあつた。私は先年この即ち子安貝 (cowry shell) 貨と、それをまた骨片を以て模造した貝形貨に就いて記し、蟻鼻錢なるものも畢竟この子安貝形を銅貨に翻譯した形に起源を發するものであらうと云ふ説を紹介したことがある¹⁾。

さて蟻鼻錢 (Ant-nose money) なるものは、早く宋の洪遵の『泉志』以來見えてゐる名稱であるが、其の外觀が人面に似てゐる所から、俗には『鬼臉子』『鬼頭』などとも云つてゐる。併し之が果して普通の貨幣として行はれ

たものか否かに就いては異説があり、桂朱谷といふ人は其の表面の文字を「昏塾水」と讀み、鑛水に際して用ゐたものであるとて、禹の治水に關係つけた様な珍説を出してゐるが、私達はそれよりも馬昂が『貨布文字考』に述べ、ラクーペリーが採用し、羅振玉翁なども信じてゐる貝貨の形から發生したとする進化論的假説に賛するものである。²⁾ また其の時代に就いても諸説があつて、前記の如く古く禹の時代まで溯るものもあるが、恐らくは戰國秦間位に置くのが最も穩當な説と私は思ふのである。³⁾

二

併しながら此の蟻鼻錢の年代觀をはじめ、あらゆる支那古物の本質や時代の想定は、實際考古學上の確實なる知見を俟つて、始めて確實に行はる可きであつて、此の種の調査研究が未だ頗る不充分なる今日の支那に於ては、到底單なる假説以上に出ることは困難である。蟻鼻錢の如きも、未だ曾つて考古學者が之を發掘したことを聞かないし、また他の如何なる遺物と之が伴出するかを私は未だ知らないのである。ただラクーペリーに據れば、朱楓の『古金待問續錄』に、河南固始縣の期思里と云ふ處で、沙石の間から多數發見せられたことがあり、又第十八世紀には江蘇省南京の挖河の堤を發掘した際、莫大なる數量を發見したと云ふことが知られてゐるのみである。然るに昭和十年五月梅原末治君の手を経て田中吉次郎氏から京都帝國大學文學部考古學教室に寄贈せられた蟻鼻錢の一塊は、其の發見地が安徽省の壽州とあるばかりで、他に詳細の事は判らないが、其の出土狀態に就

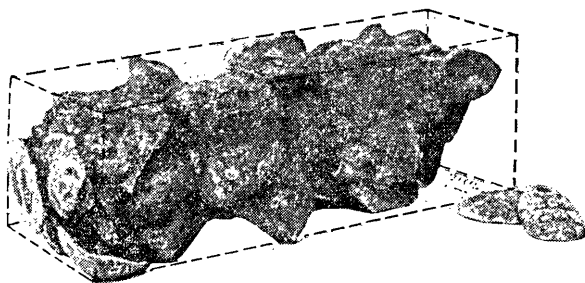
いて頗る面白いものがあり、蟻鼻錢の性質に就いて、將來明かにす可き一資料ともなること、信ずるから、此處に之を記述して置かうと思ふ。

三

此の田中氏寄贈の蟻鼻錢の一塊は、凡そ百二十の蟻鼻錢が何か長方形の小さな箱様の固い容器に入れられて、他のものを交へず其のまゝ、鏽著したものであつて、其の長さ約三寸、幅高各約一寸あつた。(第一圖)長側面の一だけは、錢が多少入り亂れて高さに幾分の不同があつて、此の面は或は蓋の裏に接した處であつたかと想像せられるが、他の兩長側面と兩短側面と底面とは錢が重壓せられて、木箱の面の様な所に密着して居つたものと見える。實は是が完全なる原狀の寫眞をば此處に掲げる可き筈であつたが、此の一篇を書く爲めに右の蟻鼻錢の一塊を取り出し、机の上に置いてある間に、私の不注意から之を取り落し、大小幾つかに破れてしまつたのは、取り返へしのつかない遺憾なことである。併しながら其の大體の狀態は前記の通りであることは、殘片から推しまた私の記憶からしても誤りはない。なほ其の容器が木箱であつたならば、木目が錢に附着してゐさうなものであるし、布袋などに容れてあつたとすれば、布目が残つてゐる筈であるが、それ等の痕も見えない所から、函の材質も之を明にすることは出来ない。併しとにかく百二十箇の蟻鼻錢(是は一塊の總重量百二十匁ばかりあり、一箇が一匁許である處から推測出来る)が、最初より一括して何かの容器に收められてゐたことは、蟻鼻

錢が通貨として用ゐられてゐたもので、それが又或る一つの重量或は價格の單位でもあつたかも知れないと思

第一圖 蟻鼻錢集塊



(點線は集塊原形を示す)

第二圖 蟻鼻錢集塊破片(左方游離蟻鼻錢)



像せしむるに足るのである。

一塊を成した殘片中未だ鋪

著して離れないものが多いけ

れども、全部略ほ一種類の文

字即ち

器

ものと推定せられる。即ちこ

れは馬昂が「當半兩」の三字と

讀み、桂朱谷が「昏塾水」と解

したものであるが私はその何

れにも遽に質することが出來

ない。そして多くの學者が舉

げてゐる「旬」字その他と讀ま

れてゐる別種のものは此の一

塊中に一つも見えない。斯く

文字は一種であるけれども、各錢の大小に至つては一樣ではなく、大きなものは長六分に達し、小さなものは五分五厘に過ぎず、殊に厚薄は一定してない。又孔は裏面に通つてゐるものと、通つてゐないものとがあつて、錢範で鑄造せられた儘の鑄放時の鱗が附いてゐるものもあるのは面白い。(第二圖)其の金質は未だ分析して見ないが、鉛色の出てる處も多いから、刀布などと同じ様に鉛の多い成分かと推察せられる。

以上は京都帝國大學所藏の蟻鼻錢塊に關する私の觀察の一斑である。今や破壊して原狀を留めないことを遺憾とするのみでなく、目下非常に多忙の爲め文献等を涉獵して、今少しでも充分に之を記述する暇のないことを残念に思ふが、此の小篇が若干でも支那貨幣史の研究の資料となるならば、私が武藤長藏君の記念論文に之を寄せた微意が達せられるであらう。(昭和十二、六、二二)

(註) (1) 濱田耕作「支那古代の貝貨に就いて」『東洋學報』第二卷第二號、同「貝貨考補遺」(同上第二卷第四號)『東亞考古學研究』所收

(2) Terrien de Lacouperie, *The Metallic Currencies of Ancient China* (600 B. C.) [Our. Royal Asiatic Society, vol. XX, 1888、羅振玉「飾廬日札」(元)『國粹學報』所載、民國二十六年別刊]

(3) 其他支那學者の著述としては、洪遵『泉志』、憑雲鵬『金石索』、金錫鬯『晴韻館收藏古錢述記』、馬昂『貨布文字考』吳隱『遜齋古泉存』、初尚齡『古金所見錄』、李佐賢『古泉匯』、王錫堅『泉貨彙考』、戴熙『古泉叢話』、翁樹培『古泉彙故』等を見がある。